

Title	Ancient Times: A History of the Early World, by J. H. Breasted, 2nd Ed., 1935, Boston
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.167(349)- 168(350)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Ancient Times : A History of the Early
World, by J. H. Breasted, 2nd Ed., 1935,
Boston.

世界大戦のために一時阻げられてゐた發掘による古代文化の研究は、その後十七年ばかりの間に、他に匹敵するものを見ないほどの發展を遂げた。

一九一九年夏シカゴ大學に東方研究所が設立せられ、その史前調査により東北アフリカに於ける石器時代の人類最古の生活を明かにすべき證據の數々が發見せられ、又メソポタミヤのウルに於ける英米研究團の發掘は西亞に於ける初期文化の發展を示すべき最新知識を増した。古代フェニキヤのラス・シャムラに於けるフランス研究團の發見(本誌第十卷一號二八頁)、アッシリヤ、バビロニヤ、パレスチナ及びヘルシヤに於ける上記東方研究所の調査、中にもそのベルセポリスに於ける廣大なる彫刻階段の發掘(本誌第十二卷三號一〇八頁)は、その最も目覺ましいものであつた。

困難なエトルリヤ文字の解讀については漸くその成功が報ぜられつゝある(ロンドン・タイムス)が、今迄人種系統の全く不明とされてゐたエトルリヤ人が西亞の民族であつて、アナトリヤからイタリー半島に移住したものであることが今や明白となつた。

米國シンシナチ大學のセンプル教授によるトロイの再發掘は大なる期待をかけられてゐる。

ケタ人の研究は大に進歩し、ケタ楔形文字の解讀はブライグ大學のホロズニー(今迄フロズニーと讀みたるは誤り)教授により見事に完成し、又ケタ象形文字の方も大に進歩し、遠からず讀み得ることは疑はれない。この言語學的研究に加へ、東方研究所により廣汎な實地調査が行はれ、アンカラの東南東約百二十五哩なるアリシヤ(Alishar)丘の發掘はケタ人到來の前後に於けるアナトリヤの進歩せる文化の物的證據を初めて世に呈示した。

エジプトに於てはライスナー氏指揮の下にハーバード・ポストン研究團の活動は大ピラミッドの建設者クフ(ギリシヤ名ケオプス)王母後の陵墓の發見に於て、ピラミッド時代に高度の發展を遂げた古代文化の全貌を見せ、ホワード・カーター氏によるツタンカーモン陵墓の劃期的發見は、その帝國時代に於ける精緻美麗なる文化の實相を暴露するに至つた。

以上の發見の結果として、ギリシヤ・ローマに先立つ文明史の記事はこの新版に於て特に著しく書き換へられ、前版(本誌第二卷一號一五六頁以下)刊行の當時、西洋史に是等の部分を附加する事について費やされた多くの辯明(初版序文)が全部省略されてゐる事も、史學に於けるその後の進歩を示すものである。

記事に於ては、前には石器時代の生活をフランスとヨーロッパから説き起し、文化の發祥地を東方に求め、再びヨーロッパに歸つて説く仕組になつてゐたのが、今やその必要なく地中海周邊の舊石器時代から順序よく一列の發展を説き得る様になつてゐる。

キリスト教國民には特に重んぜられるニネヴェの破壊が紀元前六〇六年ではなく前六一二年であることは本誌にも度々報導した如く今や學界の定説であつて、歐米の他の諸著に、又本書にも當然受容せられてゐる(二三一頁)。しかし本邦の諸大家による近刊諸著には、僅かに杉勇氏(世界歴史大系第十四篇西洋古代史三五五頁)を除き、その他は何れも不問に附せられてゐるのである。

豊富な挿畫とその解説は、初版以來本書の最も特色とする所であつたが、新版に於ては、前記ツタンカーモン王の陵墓やウル市の出土品の寫眞は言ふまでもなく、著者の主宰する東方研究所の發掘にかゝる未發表のものも含み、新發見が興味ある説明と共に滿載せられ、それにストーンヘンジ(本誌第九卷一號八〇頁)を始めとし、多くの航空寫眞が利用せられる様になつたことも初版以來の大なる進歩である。

チグリス河畔のエシユヌナ (Eshnunna) に於て新たに發見された圓筒形印章が本誌にも度々(第十一卷二號一六四頁、第十三卷一號一五〇頁以下等) 報道せられたインダス河下流のモヘンジヨ・ダロ發見のスタンブ式印章(本誌第十三卷一號口繪)と比較せられ、メソポタミヤの藝術には象が顯はれず、犀は全く知られてゐなかつた點からして、この新發見の印章に示されてゐる象牙は、その手法と共に、東印度系統のものであることを主張してゐる(一四五頁)のは、近刊『ヨーロッパ文明』(一二六九—一二七二頁)に附載せられたこの文化輸入系統についての諸説(別項拙譯参照)に一つの進歩を示すものであらう。

その他サルゴン一世時代の下水道やセンナケリブがニネヴェ

市に築造した世界最古の上水道(一九三三年發見)、エジプトからバビロニヤ・アッシリヤへの通路に當るアルマゲドンの要塞市の發掘圖などは新版に採用せられた珍しい挿畫の若干を示すものに過ぎない。

曾つて本書初版の前身たるプレスエド古代文化史の邦譯刊行を試みた自分は、今度最近約二十年間に於ける古代史研究上の進歩を完全に取入れ、活字を大きくして改版し、新しい参考書目を加へたこの良著の刊行を讀者に報じ得ることを喜ぶものである。かゝる良著は歐米に於ても當分見られないであらうし、本邦に於ては斷じてあり得ないであらう。八二四頁。時價七圓。(間崎万里)

Select Documents of European History.

vol. I. 800-1492, by R. G. D. Latham,

vol. II. 1492-1715, by W. F. Rehdewy,

vol. III. 1715-1920, by H. Butterfield, 1931, London.

學習用として便利である。各卷五志、時價各四圓二十五錢。(間崎万里)

Nampyoki 南蠻記 [Naufrage dans le Sud]

traduit, avec une introduction et des

notes, par Mme Muramatsu-Gaspardone

(Bulletin de l'Ecole française d'Ext-

rême-Orient, t. xxxiii, 1933, fasc. 1)